

私はこう
考える

「遊ぶ」こと
は「学ぶ」
こと?

危険と付き合う力をつける

嶋村仁志

大切とはわかっているけれど

夏は、子どもが積極的に体を動かす季節です。子どもは、成長とともにさまざまなことに挑戦するようになっていきます。そして、体を動かすことの楽しさや身の回りの環境についてたくさんのことを発見していきます。

その時、皆さんは「危険」について、どのような姿勢で日々考えているでしょうか。「危険に挑戦すること、子どもは自分の限界や他人との協力など、たくさんのことを学ぶ」という考え方は珍しくありません。ところが、子どもが危険に挑戦できる環境を整えるのは難しいと感じている人も多いでしょう。

一つには、今の管理責任追及の風潮があります。「けがをさせたらどうしよう」という不安は、子どもにかかわる職に就く人の最大の課題の一つです。自分だけが大丈夫と思っても、他の同僚がそうでない場合、「危なそうに見えることは、とりあえず止めておこう」というマイナスの悪循環に落ち着いてしまいます。

マイナスの悪循環を変えるには、情熱だけでは足りません。危険についての考え方と知識を学ぶことで、子どもへの実践は大きく変化します。そうした知識は、保護者から共感を得るための大きな力にもなるでしょう。

リスクとハザード

公園や遊び場にかかわる職業では、危険を「リスク」と「ハザード」という二種類の危険に分けて考えます。「リスク」というのは、自ら挑戦する危険のことです。一方の「ハザード」は、隠れた危険のことで、子どもは自ら挑戦することはできません。そして、目に見えない分、大きな事故につながりやすい傾向があります。

つまり、ハザードは知らないと防げませんが、知っていれば防ぐことができます。私たちの役割は、重大なハザードを防ぎながら、子どもがリスクに挑戦できる機会をたくさん残すことです。そして少しずつ危険に触れながら、何が危ないかを自分で判断できる大人に成長するための機会をつくることです。

ハザードの種類には、動線の交差やロープの巻き付き、摩耗、挟み込み、突起物、地面の状態など、幾つかの要素があります。紙数の関係もあるので、ここでは詳しくは解説しませんが、皆さんが調べる

ことも可能です。

また、場や遊具のハザードとともに、状況によって生まれるハザードがあります。

例えば、「高い所からの飛び降り」は、私の遊び場でもよく見られる遊びの一つです。地面にはマットを敷いて飛び降りるのですが、子どもがじつくりと時間をかけ、頭の中でシミュレーションを繰り返し返した上で飛ぶことができれば、けがはなかなか起こりません。中には、三十分も考えた末に飛ぶことを決断した子が、飛んだ直後に感極まって、じわりと静かに涙をこぼす場面に遭遇することもあります。ところが、「遅い。早く飛んで！」とはやし立てられ、自信がないのに緊張したまま飛んでしまうと、けがをするばかりか、子ども時代の武勇伝になるはずの遊びが、生涯の心の傷となって残ってしまいます。

新しい危険管理の考え方

ここで必要とされるのが、海外では「リスク・ベネフィット・アセスメント」と呼ばれる危険の判断

と管理の方法です。これは、「危険度の高さ」と「その危険に挑戦するメリット」の両面から危険を評価する方法で、子どもにかかわる職業に就き、子どもへの知識や経験がある人ならではの技術です。

例えば、「木に登る」という時、その危険（リスクとハザード）とメリットは何でしょう？ リスクは、「高い所から落ちる」「飛び出た枝が顔に当たる」などでしょうか。では、メリットは何でしょう？ 「達成感」「誰かとの協力」「手足の緊張感からくる身体の発達」でしょうか。また、特定の子どもの育ちに照らした特別なメリットもありますよね。

次に、確実に避けたい危険は何ですか？ 「細い枝に乗って落下すること」「落下した時に、固い地面に強打すること」などですか。こうして重大なハザードを回避する工夫ができれば、子どもが危険に挑戦するための対策が可能になってきます。つまり、「やめさせるための理由探し」ではなく、「実現のための工夫探し」が大切なのです。時には、状況によって「昨日は大丈夫でも、今日は難しい」という判

断も当然あるでしょう。危険は「とにかく取り除くもの」ではなく、「バランスを取るもの」なのです。

興味深いのは、イギリスがこの「リスク・ベネフィット・アセスメント」を社会の仕組みとして取り組み始めていることです。近年では政府健康安全局を筆頭に、全国規模のNPOや研究者も認める危険評価方法となり、保険会社も巻き込んだ議論が展開されるようになってきました。つまり、「リスク・ベネフィット・アセスメント」を適切に行っている遊び場では、理不尽な賠償責任の請求を保険会社が受け付けない体制が生まれつつあるといえます。

日本では、このような動きが生まれるまで、まだ程遠いかもありません。けれども、今の私たちが接している子どもは、あつという間に大人になってしまします。もしかすると、そのころの親には「自分で危険を判断することの大切さ」を教える力が身に付いていないかもしれません。子どもが遊ぶ姿を前にしている私たちは、その最前線にいるのです。

(TOKYO POLY 代表)